振り返って

平山　豊

此の「山口大学　独仏文学」が1979年に創刊されてからかれこれ30年近く経過していますから長い歩みと言えますが、にもかかわらずまだ創刊当時の情景が瞼に浮かんでくるようです。

その頃だったか、ドイツ語の若い先生方と学生時代に学び残していたラテン語の勉強会を定期的に開いたのも良き思い出です。

第２号は内尾一美教授追悼号になりました。いつも紳士であられた内尾先生の面影は、その号の後記に見事に活写されています。ゆくりなくも、それを書かれた河中正彦先生も定年間際に忽然と逝かれてしまい、退官記念号のはずが急遽追悼号になってしまったことはまだ記憶に新しい。

内尾先生の告別式は、ロマネスク様式の旧ザビエル教会で寒い冬の日に執り行われましたが、その時の司祭のプロット神父は長い間ドイツ語の外国人教師として私たちの同僚でもあった。そのプロット神父も終にこの春住み慣れた山口を去られ東京に赴かれることになった。送別の会にゆかりの会員たちが一堂顔を合わせたのもまだ先日のことのように思い出されます。

さて、私はといえば、本紀要の編集等には人並みに加わってきましたが、研究論文を載せるのは時たまのことでかねてより忸怩たる思いをしていました。

詩聖ダンテならぬわが身は、

われ正路を失ひ、学問の道の半ばにあたりて
とある暗き林のなかに惑ひぬ

の体たらくでした。

心強いことは、かつての会員で、活躍の場を他大学に移して研究に励んでこられた先生方の人数も五指を上回り、また退官されてもなお矍鑠として健筆を揮っておられる先生方も多数おられるという事実です。

大学をめぐる環境はどこも厳しくなる一方で、同学の士も漸減する寂しい状況ではありますが、現役の先生方の一層の活躍を祈願するとともに、この紀要が今後も研究の拠り所として存在意義を高めていくことをお祈り致します。